

戦後の図書館学教育と女性司書 (1)

— 鬼頭當子と大学図書館 —

Postwar Library Science Education and Female Librarians (1):
Masako Kito and Academic Libraries

小 林 卓

大学図書館学課程准教授

大 井 三代子

大学図書館学課程非常勤講師

抄録：

「戦後の図書館学教育と女性司書」として、鬼頭當子（きとう まさこ）への聞き取りによるオーラル・ヒストリーの研究を行った。鬼頭が、実践女子専門学校から、実践女子大学図書館、慶應義塾大学図書館学科、国際基督教大学図書館とすすみ、館長になるプロセスをおいながら、「結婚、出産と仕事」、「全面開架とサイン」「UTLAS、大学教育」などを聞き取ることで、鬼頭の歩んできた道がライブラリアン一筋の生き方であると同時に、戦後女性の生き方であることを浮かび上がらせた。

Summary：

This paper presents the results of oral history-based on the research conducted through interviews with Masako Kito on the subject of postwar library science education and female librarians. During her career, Kito started out at Jissen Higher Specialized School and subsequently progressed to Jissen Women's University Library, Keio University Department of Library Sciences, and International Christian University Library, and then she became the Director of ICU Library. In the interviews, she was questioned on such topics as marriage, birth and work, full open stacks and signs, and UTLAS and university education.

キーワード：女性図書館員、実践女子大学、国際基督教大学、大学図書館、オーラル・ヒストリー

Key words：female librarians, Jissen Women's University, International Christian University,
academic libraries, oral history

はじめに

日本の図書館史研究は、1990年代半ばまで、男性図書館員を中心とした図書館関係誌の二次文献に基づく記述が中心であったといっても過言ではないだろう。

こうした動きに変化が出てきたのは、1990年代後半以降からである。まず、1998年に『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』¹が出版され、日本の図書館史のオーラル・ヒストリー上、画期的な著作となった。筆者（小林）は、その研究グループの末席に加えてもらうことにより、生き生きとした歴史を獲得していくことの醍醐味を知った。

「男性図書館員中心」ということでいえば、たとえば、1983年に出版された『図書館を育てた人々：日本編Ⅰ』²では、18人の図書館人の略伝が記されているが、実に18人全員が男性である。これは、数の上でも女性図書館員の方が多いと思われる日本図書館界を俯瞰する上で、男性中心史観のバイアスがかかっていたと考える方が妥当であろう。また、比較的近年の日本図書館文化史研究会編の『図書館人物伝』（2007年）³でも、日本編10本の論文のうち、全てを男性が占めるという状況が続いている。

これに対し日本では、田口瑛子などが1980年代からアメリカの業績を紹介する形で、「図書館における女性」の課題に取り組み、1996年には、アメリカ女性図書館史の代表的著作である『文化の使徒』⁴（原著の出版は1979年）の翻訳を上梓し、以降、『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』⁵などのアメリカの女性図書館史を積極的に紹介するようになった。また、日本の図書館史としては、宮崎真紀子が1996年に「女性図書館員の誕生：大正期に図書館員教習所で学んだ女性たちを中心として」⁶を発表し、以降、「女性図書館史」の視点から論考を執筆している。上記2点を取り込んだものとしては、近年、日本図書館研究会の「図書館職の記録研究グループ」が、精力的にその成果をまとめている⁷。

そこで、本研究では、長期的な視野から実践女子大学・同短期大学に関わった女性図書館人へのオーラル・ヒストリーをまとめ、彼女らがどのように図書館という世界の中で自らの道を切り開いていったかを、生の声で記録することを目的とする。具体的には、長倉美恵子（元・実践女子大学教授）、石井紀子（元・実践女子短期大学教授）、鬼頭當子（元・国際基督教大学図書館長、国際基督教大学教育学科非常勤講師、元・実践女子大学・実践女子短期大学非常勤講師、元・実践女子大学図書館員）らにインタビューする。ここでとりあげた方々は、単に実践女子学園関係者というだけではなく、戦後日本を代表する女性図書館人である。これらの諸先人たちの「生き方」をまとめることは、女性図書館史を浮き彫りにするとともに、実践女子学園の学生をはじめとする未来の図書館人にメンターとしてのモデルと夢を与えることになるであろう。

本稿ではその第一弾として、鬼頭へのインタビューを収録する。インタビュー日時は2010年8月16日、国際基督教大学図書館において、小林卓、大井三代子、金沢幾子を聞き手として実施した。

なお、読み進める上での基礎データとして、鬼頭當子（きとう まさこ）の略歴を以下に示す。

鬼頭當子の略歴

1929 年生まれ

1948 年 実践女子専門学校文科国語科卒業

1949 年 実践女子大学図書館勤務

1951 年 実践女子大学図書館退職

1953 年 慶應義塾大学図書館学科 (Japan Library School : JLS) 卒業

1953 年 国際基督教大学図書館勤務

1971 年 国際基督教大学図書館主任

1975 年 大妻女子大学図書館学担当非常勤講師

1978 年 国際基督教大学図書館長補佐

1986-1998 年 国際基督教大学教育学科非常勤講師 (第1学期のみ)

1987 年 実践女子大学図書館学講座非常勤講師

1989 年 国際基督教大学図書館長

1991 年 国際基督教大学図書館 任期満了により退職

1993 年 MK図書館研究所所長 (※MKとは、鬼頭當子の頭文字である)



鬼頭當子

1. 実践女子専門学校入学から、慶應義塾大学図書館学科卒業まで

鬼頭 実践に入った理由は、私の母の妹2人が……。母は長女で、母の母——私の祖母は体が弱かったから、家事をしなきゃいけないからというので、専門に行きたかったけど、行けなかったんですね。祖母の妹、大叔母は日本女子大学社会科第1回卒業生でした。また、家では受験は1校しか受けられませんでしたから迷いましたね。叔母が2人、実践の国文と家政科に行っていたんですよ。うちのすぐそばに日本女子大のピアノの先生がいらしたんで、私は日本女子大を受けようかと思ったんですよ。母は、日本女子大に入ると思っていたのに、思うことがあって私が嫌だと言ったので、がっかりしちゃったのね。それで私は、叔母が実践の卒業生なので、実践だと思って、実践を受けたんですよ。

だけど、実践がどこにあるか知らなかったの。(笑) 渋谷にあるってことだけで。それで、試験の時に、渋谷の駅を降りたら、そろそろそろそろ人が行くので、その人たちの後を付けて行けば、きっと実践だと思って、後ろを付いて行ったんですよ。そしたら実践だったの。(笑)

小林 在学中は、どのような感じでしたか。

鬼頭 まだ戦争中ですからね。その時は1つしか受けられなかったの。併願はできない。学徒動員で工場にいたでしょう。それで、受けて落ちたらもう駄目で、また、その工場に行かなきゃいけない。

実践に入学した時はまだ戦争中でしたから、空襲警報が鳴る中での授業だったんです。福井毅先生、福井久蔵さんの養子になられた方ですが、その先生が元気のいい先生で、空襲警報が鳴ったら、「さあ皆さん皆さん、白い着物、洋服は駄目ですよ。白い洋服を着ていたら、新型爆弾で死んじゃいますよ」とおっしゃったのを覚えているわ。広島に新型爆弾が落とされた、

と言う報道があって学校は閉鎖になってしまったの。学校が危ないからって閉鎖になって、私も疎開をしたの。茨城県の水戸の先から、また電車に乗った、小っちゃな村に行っていたんです。

戦争が終わったから、授業が再開されるかなと思って帰ってきたの。学校に行ってみたら、焼けただれた外壁だけが残った校舎があって、愕然としました。全部焼けてたの。

大井 そうすると、入学なさって、それほどたないうちに疎開なさったのですね。

鬼頭 そう。校舎は焼けて、ガラスはない。ひどかったです。だから、図書館も何もないですね。

小林 それでまた、学校が始まった。どういう形で？ 建物なしのところから始まったのですか。

鬼頭 その、ひどい中でやったんです。コンクリートの外壁だけは残っていましたから、風雨を凌ぐことはできたんです。床板は焼けてね。曲がった鉄筋がむき出しの床でした。でも授業が受けられる喜びは大きかった。

金沢 どんな授業がお好きでしたか。

鬼頭 その頃の実践は、立派な先生が揃って居られましたね。金田一京助（言語学）、御退任後は春彦御子息が受け継がれました。山岸徳平（源氏物語）、武田祐吉（古事記）、武島羽衣（有職故実）、輝岡康隆（近世文学）。金田一京助先生、武島羽衣先生には、叔母が国文学科在学時代にお習いしたとのことで、実践には随分長いこと教壇に立たれていたと思います。専任教員では日本文学史の研究者として著名な西尾光雄先生、福井久蔵先生の娘婿になられた福井毅先生もおられました。

授業については、それが私は悪者だったんですよ。そのころ、1人、演劇をやっている人がいたんですよ。その人が「今度、都立高校が演劇をやるのに女性がいらないから、行かない？」と言ってね。私を含めて、5人が誘われたんです。それで、「行こう、行こう」と行ったわけ、都立高校に。男の子だから、その興味もあったと思うんですよ、みんな。だから、演劇の練習をする時に学校を抜けるわけですよ。で、福井先生が「寛君 [鬼頭の旧姓]、クラスに出てくれよ」「先生、だって駄目なんですよ、演劇の練習ですから」って。（笑）しかも、都立高校の雑誌の演劇の評論に「光っているのは寛當子」って書かれたんですよ。（笑）

3年生の半ば頃、新劇に興味を持って、俳優座の研究生の試験を受けようと思って、父に話したんです。水戸徳川の家老の子孫であることを自負していた父の逆鱗にふれて、大層叱られました。父が怒って、「俳優とは何だ。あれは世間では河原乞食って言うんだ。そんな河原乞食にするために育てたんじゃない」と言うのです。そんな者になるなら勘当だと言われて、仕方なく俳優希望は諦めました。

私が卒業したら、父は河原乞食になっちゃうといけけないので、「勤めをしちゃいけない」と言うんです。みんなは就職運動をしているのに、私だけ、就職運動ができないんですよ。それで、「お茶とか、お花とか、そういうものを覚え」と言われました。もう無聊ですよ、何もすることがないんですから。毎日、銀座に行って百貨店の中を歩くか、銀座の町を歩いているしかないんです。

父は銀行員なものですから、銀行関係で、雑誌を作る出版社が出来たから、「そこに行け」と言われて、「ああ、編集ならいいや」と思って行っただけです。「3号雑誌」というのが昔あって、その出版社は3号でつぶれました。今度行く所がないじゃないですか。それで、「新日本貿易」とか何とかいう新聞を見たら、採用の募集があつて、行ったら、延々と並んで、階段からずっと続いて、すごい人。そこの試験を受けたら、入ったんですよ。いろんな家具や何かを外国から輸入する会社だったんですけどね。そのころ私はコーラスをやり始めて、土曜日の午後がコーラスだったの。その会社は、土曜日の午後は休みだったのに、土曜日の午後もやると言い出したので、私は「それなら辞めます」と辞めちゃったの。(笑)「土曜日の午後は私の大切な時間ですから辞めます」と辞めちゃったんですよ。

それで、今度また、やる事がなくて、卒業後ふらりと実践の図書館に行ったら、福井先生がおられて、「図書館に勤めないか」とのお話をいただいて、「はい。じゃあ来ます。」とお返事して、そのまま勤める事にしてしまいました。図書館員になったんですよ。

当時二人の図書館員が、司書資格取得のために文部省司書資格養成所に通っておられたので、そのお留守の役だったと思います。その方が資格取得後実務に戻られた時、慶応大学に図書館学科が新設される新聞記事が掲載されたんです。図書館に興味を持ち始めた時でしたから、「いやー、これに行こう」と直ぐに受験を決めました。

金沢 実践から慶應の図書館学科へ入学して、その授業を受ける。その英語力はすごかったと思います。

鬼頭 ないですよ、私なんか。もう苦勞して、顔がこんなに細くなっちゃいましたよ。

小林 全部、英語の授業ですか？

鬼頭 全部、英語ですよ。だけど、通訳は付いている。

小林 それは同時通訳なんですか。

鬼頭 講義の一区切り毎に日本語通訳がありました。講義後は必ず洋書を読んでレポートを提出する宿題がでました。

小林 アサイメントがすごい。

鬼頭 アサイメントが。「この本の何ページから何ページを読んで、論文を書け」と言うの。それを読むのに、もうほんとに苦勞しましたね。女学校時代英語は敵国語でした。英語の学習はやらせなかったでしょう。ギトラー先生が「みんなの顔が、だんだん細くなった」って。「目がギリッとなった」って。(笑)「どうしてだ？」って。そしたら、1人の人が「アサイメントが多過ぎる。英語の本を読んできて、論文を書くなんて、多過ぎる」と発言しました。その後宿題は減りましたよ。あの時は本当に、もう寝る暇もないぐらい勉強しました。

学期末に国際基督教大学 (ICU) 図書館から慶應に募集が来ていたの。

小林 やっぱ ICU だから慶應から人を欲しいということで、募集が来ていたんですね。

<解説>

『実践女子学園百年史』によると、1945年5月25日の夜、渋谷の常磐松にあった実践女子

学園は焼夷弾の直撃を受けて全焼した。翌日、学校の内部からは煙が出て、くすぶっていて、校庭には落ちた焼夷弾が半分程のめりこんでいた。学園の建物の85%が消失し、図書館も全焼した⁸。記念館にあった図書館は、下田歌子の祖父の東條琴臺の所持していた書籍のほか下田歌子の資料も保管されていた。教員の中には、学校ならば安全だろうと蔵書を学園に持ち込んだ者がいたが、それらの多くが灰燼に帰した。

文部省は、9月の第2学期から学校授業の再開を指示した。学園は焼け残った校舎を最大限に活用して応急の修理を加えて教室に転用し、9月から授業を再開した。1947年9月理事会は「実践女子学園復古委員会」を結成し、生徒父兄や同窓生などに一口千円の寄付を依頼することに決定した。1949年5月、学園創立50周年及び実践女子大学開校記念事業として各種事業を行うことになった。その事業の中に図書館の拡張事業が取り上げられ、木造2階建（延坪約200坪）の建物が建築されることになり、旧記念館に書庫が設置された。1949年4月に実践女子大学の開設に伴い図書館の組織化が図られ、藤井甚太郎教授が図書館長に就任し、5年間で蔵書10万冊の目標を立てた。

戦後のこうした動きの中で、国文科に在籍していた高橋ミキ子は、1945年9月に学年短縮により9月卒業を迎えた。翌年4月1日に実践女子大学に専任職員として採用され、図書館業務に従事することになった。当時の図書館の専任職員は高橋のみであり、高橋は1951年に図書館養成所で司書資格を取得する。その年に慶応義塾大学の図書館学科が設立開講となった。鬼頭は慶応義塾大学図書館学科の第1期生になる。

2012年9月10日に、大井は高橋ミキ子の自宅でインタビューを行った。以下は、高橋が実践女子大学図書館に就職した当時の状況について語ったものである。

大井 先生は1945年9月に繰り上げ卒業になりましたね。その半年後に実践に就職しますでしょう。

高橋 そう。

大井 どんなことで就職なさったんですか。

高橋 あなた知らないかしら、平尾先生っていう先生がいらっしゃったでしょう。

大井 平尾美都子先生。

高橋 そう。あの先生が、学校が焼けちゃって、図書館も焼けて何も無いから、図書館を見てほしいということだったんですよ。

大井 あの頃、女性は就職したくてもできない人はたくさんいたと思うんですが。

高橋 だけど、就職先はいくらでもあったのよ。男の人がいないから。

大井 あー、そうか。

高橋 戦争に行っちゃっているから。ただね、出版社がたくさんあるけれど、いつ潰れちゃうかわからないのよ。

大井 1946年4月1日から実践に就職なさった。で、前に私がこちらに伺ったときに、先生は

図書館で専任職員は私一人だったと。

高橋 そう。

大井 たしか、総務で辞令の記録を見せていただいた時に、もう4月1日で、先生は図書館の司書として採用されると記録されてあるんですよ。

高橋 あ、そう。(笑)

大井 図書館養成所に行かれたんですよね。図書館養成所で司書の資格をとることを前提に、4月から通われたのですか。

高橋 1950年4月から。その間、東大の先生が1週間に1回来ていただいて、教えてくださったのよね。そんなんじゃ、とってもね、図書館は、やってけない。上野にこういうところがあるからということで、それで理事長の蓼沼繁枝先生にも話してくださった。その時の学長が宇野哲人という、宇野哲人先生も推薦してくださって、それで受けたのよ。

大井 養成所は入るのに、やはり試験があったのですか。

高橋 あるわよ。

大井 どんな試験だったのでしょうか。

高橋 あのね、えーと、作文と英語なの。

大井 結構、英語って難しかったですか。

高橋 戦争に負けちゃった時に、英語が必要だというの。明治学院がすごく近くて、あそこでは夜学でなくて、講座があったの。だから、私はその講座に行つて。昼間働いて、夜はその講座に行っていたの。

大井 そうだったんですか。

高橋 だけど、どういうことか知らないけれど、夜学があつて講座でしょ。講座がなくなっちゃったの。それで、しょうがないから、今度は、YWCA。あそこの英語にいったの。

大井 明治学院だったら、お住まいが白金だから近かったんですね。

高橋 そうなの。

大井 YWCAも神田だからわりと近かったですね。

高橋 それをしなかったら、とっても語学力、ないんですもの。ねー。

大井 戦争中は敵国語で、教えてもらえない。

高橋 英文科がなくなるかもしれないといっていたから。

大井 鬼頭先生は慶應の図書館学だったでしょう。

高橋 あの人は、あの一、私が養成所に行っている間留守になっちゃうから、アルバイトに入つたのよ。それで、私が養成所を出る年に、1952年だね、あの、慶應に図書館学科ができて、あの人は受けて1期生。

<解説>

「労働力状態，男女別15歳以上人口－国勢調査（大正9年～平成17年）」によると、昭和22年の労働力の総数61,390,725人の内、男29,673,127人、女31,717,598人で、女性の数が

圧倒的に多い⁹。高橋が述べているように、終戦直後は「男の人がいない」という状況であることを示している。また男の就業者 20,853,709 人、完全失業者 463,532 人、完全失業率 2.2%であり、女の就業者 12,800,855 人、完全失業者 203,758 人、完全失業率 1.6%である。男の労働力率は 71.8%で、前回の昭和 15 年の調査の 90.1%から見ると大幅に下回り、戦争や食糧難による疾病、傷害が影響していると考えられる。家庭の中心であった夫の戦死で、収入を得るために働かなくてはならない女性たちがいた。昭和 22 年の女の完全失業率が 1.6%は、「就職先はいくらでもあったのよ。男の人がいないから。」という高橋の話にほぼ合致する。

なお、慶応義塾大学図書館学科の設立については、近年研究が進んでおり、三浦太郎らの「占領期日本におけるジャパン・ライブラリースクールの創設」¹⁰などの業績がある。

2. 国際基督教大学図書館

2. 1 結婚、出産と仕事

鬼頭は、国際基督教大学図書館に就職し、図書館建築家の鬼頭梓と結婚する。

鬼頭 ICU の採用試験の中に、湯浅八郎総長の面接試験が組まれていました。試験の中で、「結婚するから仕事を辞めるとは言わないように。立派に仕事を続けて下さい」と念押しされたんです。当時、女性は結婚を契機に退職するのが常識とされていた中で、総長のこの発言は、私に強いインパクトを与えました。その後、結婚して周囲に奇異な目を向けられながらも、仕事を続ける事ができたのは、総長とのお約束があったからだと思いますね。

結婚するのに、彼の給料は 3,500 円。私は、ICU の給料が 1 万 2,000 円。だけど、「いいじゃない、お金なんて。別にお金で生きてるわけじゃないから。その時、生活できればいい」と思って。みんなに笑われました。「あなた、3,500 円の給料なんて、ある？」なんて言われたんですね。だけど私は、お金はあんまり関係ないんじゃないかなあと考えていたんです。今は、お金がないと結婚しないなんて言うけど、お金なんてあったって、お金は「御足」と言って、逃げちゃうんですから（笑）。だから、お金なんかに、とらわれるのはおかしいと思って。その人の人間性ですよ。人間が良ければ、お金は関係ないと思っています。

ICU は、発足当時は、教養学科一学年だけです。図書館には年齢の高い男性職員が 1 人だけでした。そこに慶応卒の司書 4 人が加わったのですが、1 人の男性は有名な会社に転職して、3 人の女性が残りました。

学年が増えて、教育が充実してきた頃に、アメリカ留学を終えた比較的年齢の高い専門職の女性が、図書館長に就任しました。続いて、資格取得を持って帰国した女性が、洋書目録担当の上司に置かれました。2 人とも学内の独身女性専用のアパートに住まわれました。結婚している女性が図書館で働いているのを見てね、とても奇異に感じられたんでしょう、「結婚なさったのだから、いつお辞めになるの」との質問を何度も受けました。館長は日本の法律をご存じなくて、産前産後の有休休暇が与えられる労働基準法があることを話しても、「えっ、あなたがいらっしゃらなくなって、お休みになったら、あなたのお仕事はどうなさるの?」と言われてましてね、私は休暇を取るのを止めて、出産前日まで働きました。

それで今度は、子供が生まれたら、産後の育児休暇を頂きますよね。産前、幾日？

大井 産前産後8週間ですね。

鬼頭 私の下に男の職員がいたんですよ。で、「今日は休む」と電話したんです。「子供が生まれたから休みます」と言ったら、その子は「えーっ、うそだ、うそだ」って。(笑) 気が付かなかったんですって。「えーっ!？」って。今度、産後は、どうしたって休みたいじゃないですか。それも「とんでもない」と言うのです。それで、もうほんとに……。だから私は、ICUのすぐにそばに越してきて、お手伝いを2人頼んで、1人は子供を見る、1人は家事をする。

ICUは、夜は10時まで開いていましたから、私は夜になったら、鬼頭〔梓〕が帰ってくるので、鬼頭に頼んで、ここへ来て仕事をしたんですよ。学内の独身アパートに住んでいる洋書目録担当の女性は、学内で食事をとっていたのね。夜6時にならないと夕食時間にならないので、それまで彼女は図書館で仕事をしていたのね。私が夜行くと、まだ部屋にいましたので顔を合わせてしまうんです。彼女が、私が夜仕事に行くことを館長に報告なさったのね。「夜に来て仕事をやっている」と。手紙が来たんですよ、うちの館長から。「あなたは夜に来て、やってらっしゃる。あなたはパートに変えましょう」と。その手紙、とってありますよ。だから、私は返事を書きました。「私は自転車で5分の所に住んでいます。私の庭と同じです、ICUは。だから、庭を散歩しているのと同じです」と返事を書いたんですよ。いじめられましたよ。ほんとに、いじめられた。今では考えられないと思う。今は、旦那さんだって、育児休暇を取れる時代でしょう？

あの時代は女性が働くのに対して、みんなで頭をたたいた。それに平気で私は立ち向かったの(笑)。だから、ねえ、ほんとに……。その代わり、人に絶対負けちゃいけないから、もうとにかく勉強しなきゃ駄目だと思って、その分は人に負けないように、しましたけどね。

大井 鬼頭先生が、ICUで結婚なさってご苦労なさった思いは、仕事を持って働く女性に共通のことですよ。

鬼頭 ほんと。大妻女子大学の学長から、「鬼頭當子を大妻女子大学の非常勤講師として図書館学を教えてもらいたい」という手紙が、ICUの学長に來たんですよ。それで、その時の図書館長が、教員ですけどね、主幹主任会議というのに「こういうふう到大妻から鬼頭さんを派遣してもらいたいというのが來ました。ついては鬼頭さんに行ってもらいたい。派遣に応じてもらおうと思います」と言ったら、反対したんですよ、主幹主任会議が。「そんな所に行ったら、その時間の仕事はどうなるんですか」と、ものすごい反対が出た、主幹主任会議で。そしたら、先生が「あんたたちは何を言ってる!」と怒鳴ったの。「あなたたちは、大妻女子大学の学長からICUの学長あてに來た手紙に対して、それを断れと言うんですか。どういうことですか。学長に対して反対だと言うんですか」と言ったら、みんな黙っちゃったの。

その時の図書館長は、理学科の教授大内謙一先生でしたが、私が大妻女子大学創立90周年記念式典の席で、「長年本学の教育に従事した、大学に貢献した」との感謝状と記念品を理事長からいただきましたが、それは、反対意見を排除して、講師派遣を認めてくださった当時の館長の英断のお陰だったと有難く感謝しています。

2. 2 全面開架とサイン

小林 ICUに来られた時、ここは日本で最初の全面開架の画期的な図書館として開館したんですよね。それで、すごく活気があったとか、働きがいがあったとか、そういうのは？

鬼頭 大変でしたよ。だって、まだ図書館の棚はガラガラですから。それで毎日、運送会社が、梱包された木の箱を運んでくるんですよ。それをまず、ガリガリガリガリ開けて。中は寄贈本です。寄贈本を、机に一例に並べて、端からコールナンバーを鉛筆で書いていくんです。学生アルバイトというのを使っていましたからね。だから、分類番号などを全部暗記してなきゃ駄目でしょうね。

もう毎日のように箱を開いてね。棚に本を入れても移動しなきゃいけない。昼休みもなく働いたんですよ。で、もう疲れて、空いている棚板を並べて、昼休みに寝たことがあります。今だったら、そんなことはしないでしょう。そして今度は、そうやったのを、タイプライターを持ってきて、タイトルを打ち込んで、カードを作るんですよ。私たちは、テンポラリカードと呼んでいました。で、今度はカードをファイルしなきゃいけない。そこからやったんですよね。だから、最初からポツとあったわけじゃないんですよ。

小林 寄贈は、どこからが多かったんですか。

鬼頭 アメリカですよ。アメリカから船で、木箱に入って届いたから、ギーギーと開けて、コールナンバーを付ける。こっちではタイプライターで打つ。カードを作ってファイルしていく。そういうのをやりましたね。

小林 鬼頭先生が書かれたもので、ちょっと感じるの、家具とかサインとか、あと、後のMK図書館研究所とかにもつながるんですけど、わりと、“もの”としての図書館というものにこだわったというか。

鬼頭 サインは、ここは何もなかったんですよ。必要に応じて、各自がマジックペンで紙に書いたのを貼ってました。それぞれの字体で書かれているのを見ると、汚いと感じたのです。これは統一したデザインのサインを専門家に頼もうと思ったんです。きれいなサインは、図書館の雰囲気をととても良くした、と思ってます。

専門家をお願いしたのは、他にもあります。「図書館用の案内ビデオ」です。新入生のオリエンテーションは、講堂で開かれていたんですが、その中に図書館利用の案内が組み込まれていました。図書館で作ったスライドを上映して、コマ毎に、館員がマイクを使って、画面の説明をしていたんです。授業が始まって、新入生も図書館を利用しに来るんですが、館内を探し回っている姿に、何回か出逢ったんですね。「何を探していますか」と聞いているうちに、あのスライドは役に立っていないと気付いたんです。時代遅れの一コマずつ手で回すスライド上映、それに素人の館員がマイクを使って説明する。映像の時代の若者たちには向いていないと反省しました。それで共同テレビにお願いして、映画を作ってもらったんです。オリエンテーションでは、映像フィルムを使い、ビデオテープに移したのは、何時でも見られるように、図書館入口脇のコートルームにテレビを置いてビデオをセットしておきました。このビデオテープは、外部の図書館や司書教育担当の先生方から貸出希望が来て、外部機関でも参考にしてい

ただいたようです。図書館の管理運営は、専門職が担当するように、専門の分野に関しては素人の図書館員が手を出すのではなく、その道の専門家をお願いすることが良い結果を得られると痛感しました。

それから、家具もそうです。長いこと座っているんですよ。だから、普通の椅子と違うんですよね。最初の椅子は、外国人が、デザインしたの。そして、その背もたれがズッキュキュッキュッと音を出すんです。今は、もう、ないかもしれないけど。これが、座高が合わない。向こうの人は、足が長いでしょう。だから、学生が「足が床に届かない」と言ってきたんですよ。で、「疲れちゃう」と。外国人に頼むならば、日本人を研究して、やってくれるならいいけれど。これは今たぶん鬼頭事務所でデザインしているかもしれない。

小林 それで、昭和 58 年に「専門図書館協議会 関東地区協議会」の「図書館のサイン表示コンクール」というので、ここは表彰を受けていますよね。

鬼頭 そうです、そうです。

小林 そうなのは、どこかで鬼頭梓さんの影響があったようなところがありますかね。

鬼頭 サインについてはどうかなあ。

小林 サインとか、家具とか。

鬼頭 家具は、あるかもしれませんが。サインは方々にあって、本館のほうに行っても、みんなが、やたらとマジックで書いたり、下のほうにペタペタ貼っている。見ないですよ、汚いと。紛争の時に、ペタペタペタペタみんなが書いたでしょう。汚いです。だから、「きれいに書かなきゃ駄目だ」と言って。ということで、専門家に頼んだんですよ。でも、家具は、たぶん鬼頭の影響があると思いますね。

つい最近ですけど、以前一緒に仕事をしていた後輩から電話があって、「ICU 刊行物のコーナーがレファレンスルームにあるのがとても便利で、調査に役だっています。鬼頭さんが、何でも捨ててはいけなと溜めていたことを思い出しています。」と嬉しい話をしてくれました。彼女は広報部に席を置いているので、きっと学内刊行物の調査をする機会が多いんだと思いますけど、その電話で昔のことを思い出しました。

ICU が創立して日が浅かったけれど、種々の宣伝資料や研究業績の雑誌等を出していました。これは 50 年後に残っているだろうかと思ったんですね。慶應の古い図書館を思い出して、それでスタッフミーティングに、ICU の刊行物のコーナーを作ったらどうか、と提案したんです。当時の女性館長は、「図書館のスペースは少ないのに、特別コーナーの必要はないし、目録カードを引けば刊行物が何かわかります。」と却下されちゃったんです。同時に専用書架の予算も認めてもらえませんでした。とっても落胆したことを覚えています。それに会議の席上で、誰も賛同意見を出してもらえなかったんです。それが次の日、当時、館長補佐をしていた総務部門担当の片山亘氏が、「書架の予算が余っていますから、鬼頭さんが欲しい専用書架を注文してください。」と何気なく私の席の脇で言われて、本当にびっくりしてしまいました。温和な性格の方ですから、会議の雰囲気から、何の発言もされなかったんだと思います。直ぐに専用書架を注文して、図書館の奥の未整理本が置いてある所に置きました。集めた資料は、段ボー

ル箱に詰めて目立たないように置いといたんです。その後、女性館長が一身上の都合でICUを退職されたんで、晴れてレファレンスルームにコーナーを作ったんです。

それから50年経って、役に立っている話を聞かされて、今お役にたっているんだと、当時の片山亘氏の陰での援助に、片山氏と一緒に喜びたいと思いましたね。彼は東大で西洋史を学ばれた方だったと思います。有難かったですね。今、脚光を浴びているコーナーがあるなんて。

2. 3 図書館協力

小林 鬼頭先生がICUにおられた時のお仕事の話とかも聞こうと思うんですけども、いろいろ書かれたものを見ると、図書館協力ということに、すごく熱心にされていたと思うんですけども。

鬼頭 そうです、そうです。何しろ、ICUは新しい大学だから、ものがないんですよ。だから、よそからも借りたい。「東京西地区大学図書館相互協力連絡会」を作ろうと計画を練ったのは東京経済大学図書館の多田二郎氏との話から生まれた構想です。彼と一緒に、しょっちゅう、いろんなことをしゃべっていてね。地区の大学図書館に呼びかけの手紙を出しましたが、お断りの手紙が一通だけあったんです。特殊分野の単科大学で、自分の所は専門分野の資料を十分に集めているので、他の図書館の資料を使うことがないとお手紙でした。それがたちどころに覆ったんです。その大学の学生2人がICUの図書館に無断で入館して、蔵書をカバンに入れて持ち出したんです。蔵書にはブックディティクションテープが貼られていましたから、出口でチャイムが鳴り、バーが動かなくなったんですね。2人の学生はびっくりして、持ち出そうとした本を出して、ひたすらあやまりましたが、私は直ぐにその大学の図書館に電話をしました。図書館長と事務長が直ぐに来られ、2人の学生を引き取って行かれました。「うちの学生が、他の大学図書館の資料に興味があるとは思ってもよらなかった。」とおっしゃって、加盟館になられたのです。劇的な事件でした。

読書欲、研究心は幅広いものです。特殊分野に限られるものではない。それだからこそ、東京西地区大学図書館相互協力連絡会が果たす役割は大きいのだと思いました。

大井 保存協力ですよね。

鬼頭 そうそう。その前身は、「四大学外国日刊新聞」というのをやったんですね。図書館の下に、もう今はどうなったか分からないけど、新聞の古いのをみんなためて、ついに天井へ来ちゃったんですよ。電気の傘の下で、危ないと思ったの。火事になっちゃう。それで、これ、とっておく必要があるのかなあと思ったのです。だけど、とっておかないと、捨てちゃったら……。その後に縮刷版や何かが出てきましたけどね。だけど、縮刷版は何年版というのになっ
ていて、記事が載っていないのがあったのかな。とにかく、とっておいたんですよ、全部。時たま、それを利用する人がいるぐらい。それで、これはもう、こんなにとっておいてもしょうがないと言って。

そしたら、成蹊大学の人が、「じゃあ、お互いに捨てないか」ということになって。それで、うちは何を集めるか。『ニューヨーク・タイムズ』は全部、マイクロフィルムもあったから、じゃ

あ ICU は『ニューヨーク・タイムズ』で、あっちは何々と決めたんですよ。それで、「要る時には、そこを使うということにしましょう」というので、やったんですね。それが最初なんです、新聞は。そしたら今度は、「そうだ、せっかくなんだから、この大学同士でやりましょう」ということになって。

それから、私は、ICU だけじゃなくて、「これだけ敷地があるんだから、門に出るまでの間に保存書庫を作ろう」と。そして、「この辺の地区のみんなを集めよう」と、そういう提案をしたことがあるんですよ。土地は、うちにあるんだから。で、「維持費は、みんなで出し合えばいいんじゃないか」と提案したけど、やっぱり大学間のいろんな問題があって、すぐにはいかないし。上のほうが動いてくれないと。こういうのは絶対、図書館だけじゃできないですからね、大学そのものが動かないと。

小林 でも、その根底には「合理的に、ものを行いたい」という。

鬼頭 うん。先生が文句を言ったら、「こういうデータがありますよ」と。

小林 示してやろうと。

<解説>

鬼頭の夫君、鬼頭梓氏について記しておく、著名な図書館建築家として知られた人物である。その設計に携わった代表的な図書館を挙げると 1968 年の東京経済大学図書館（第 19 回日本建築学会作品賞）、1973 年の日野市立中央図書館、1992 年の茨木市中央図書館、2007 年の函館市中央図書館（日本図書館協会建築賞）などがある。1992 年 6 月から 1996 年 6 月まで日本建築家協会（JIA）会長をつとめた。その業績と思想の全体像が見られる書籍として、『建築家の自由：鬼頭梓と図書館建築』¹¹がある。

本章で書かれた鬼頭當子の置かれた状況を全国的に見てみると、当時の女性図書館員の実態、待遇を示すいくつかの調査が行われている。

1976 年から行われた全国の私立大学の女性図書館員約 1000 名の調査で、「生理休暇などの女性を保護する勤務条件が整っている」に対し「あまりそう思わない：28.6%」「まったくそう思わない：31.2%」で、両者を足すと約 6 割の女性図書館員が、女性の特性を考えた配慮がなされていないと感じている。同調査では、「昇進の機会が女性に対しても開かれている」に対しては、「あまりそう思わない：39.0%」「まったくそう思わない：37.4%」で、回答者の 3 / 4 以上が昇進に対して男女差別があると感じているのである¹²。

また、これより少し前に公共図書館の女性職員を中心にした 150 名の調査（回答者 46 名）の結果¹³を参考までに挙げておくと 46 名中 22 名が「女性としての差別経験あり」と答えている。本来ゼロであるべき女性差別が、当時約半数を占めていたことを示すデータである。

サインについては、鬼頭の著作として、「サービス側から見た図書館家具の問題」が、日本図書館協会発行の『家具とサイン：図書館施設計画マニュアル』に収められているほか、1973 年

には専門図書館協議会関東地区協議会の「図書館のサイン・展示コンクール」で国際基督教大学図書館が優れているものとして表彰されている。¹⁴

3. 館長へ ― UTLAS、大学教育など

3.1 UTLAS

小林 「図書館協力」というのが UTLAS (※本章末で解説) の導入につながったのでは？

鬼頭 ええ。というのは、大学院の設置、新しい学部 of 設置とかいうので、本がドーンと買われるんですよ。みんな“積んどく”ですよ。

小林 もう滞貨というか、間に合わないんですね。

鬼頭 間に合わない。それでまた、カタログガーというのは、意固地というかねえ、こだわる方が多いんですよ。

大井 金沢 (笑)

小林 お二人、笑っていますけれども (笑)。

鬼頭 カードの中の、ここはカンマか、ピリオドか、行を変えるか、延々と議論しているの。この間に、もうちょっとカードを取ってくればいいのに……って (笑)。「いや、これはカンマですよ」とか「ピリオドです」って、カタログガー同士が、やっているんですよ。それで、どんどん、たまっちゃったんですよ。1万冊ぐらい、たまりましたかね。それで、これはどうにかしなきゃいけないと思って。それで、私はカナダの UTLAS を見に行ったんですよ。「これだ!」と思ったの。

小林 まだ「書誌ユーティリティ」なんて言葉も日本にないころですよ。

鬼頭 そうですね。その前に、私大図書館協会が何かで UTLAS のデモンストレーションをやったの。それを見て、「これだ!」と思ったんですよ。そしたら、カタログガーの人が反対しましたよ。「なんでコンピューターなんかで、そんなものができるんだ」と、「カタログというのは1冊1冊を見て分類するんだ」と、「そんな機械なんかで、できない」と、カタログガーはみんな反対した。

小林 それは ICU のカタログガーだけではなくて？

鬼頭 いやいや、ICU のです。ICU が1万冊も滞貨していて、先生がガンガン怒るんですよ。「いいじゃないか。もう適当に出せ」とか。適当に出せないですよ。そんな1万冊も出しちゃったら、後で見るのが大変。それで私は、これは、もうコンピューターを使うしかない……。ところが、みんなはコンピューターって何だか知らないし。で、コンピューターセンターというのが ICU に出来た時に、新しいもの好きだから、これで何かできないかなと思って、コンピューターセンターのオープンの講義みたいなものがあったから、そこへ出たんですよ。それで、これだったら、逐次刊行物が、まずできるんじゃないかと、同じタイトルだから。私大図書館協会の助成金をもらって、あと2人の人に呼び掛けて。これならコンピューターでできると思ったんですね。逐次刊行物が、同じタイトルでつながっているから。ところが、本でしょう。UTLAS を見て、「これは……」と、また思ったんですよ。もし戦争になったら、データが、

よその国に行っちゃうじゃないですか。

小林 なるほど。当時は、まだ、そう……。今の私たちには、そういう感覚はないんですけども。

鬼頭 私は戦争を経験しているから。よその国にデータが行っちゃう。そういうのが、はたして、いいか悪いか。なんていうのも考えて、これは見に行くよりしょうがないと思って、それで見に行ったんですよ。私立大学連盟か何かの助成金を申請してだったと思います。それで、UTLAS に行って見てきました。データが3カ所ぐらいに、分散してあるんですね、同じものが。爆弾でやられた時に、ここがやられちゃったら、パーになったら困ると思って。手元にはオンラインで出すんですからね。それで、「これだ!」と思ったけど、カタログガーがやらない、絶対反対して。

小林 というか、国内で前例がないわけですよ。

鬼頭 はい、そうですよ。で、カタログガーって、一番保守的でしょう。だから、私は一策を考えたんですよ。UTLAS が無料期間を設けてくれたの。向こうがテスト期間で。「無料だから、図書館の誰でもいいから使ってください」と、「タダなんだから、やりたい人は誰でもやってください」と言ったら、みんなは、面白いから、いじってみたいわけですよ。向こうとつながるんですからね。

小林 それは新鮮な感覚ですよ。

鬼頭 そう。それで、ほかの人たちが、やったのね。そしたら、カタログガーの一番保守的な男の人、その人が苦々しく思ったんじゃないですか。自分がカタログガーなのに、よその全然違う人が、やっているの、「なんだ、おまえたちなんかできないくせに」と。ところが、出てくるのは立派なカードで、(笑) できちゃうわけですよ。そして、向こうにやると、向こうからカードが送られて来るんですよ。それで、ちゃんとしているわけじゃないですか。最初は絶対いじらなかったですよ、置いても。私はもう、みんなに、「タダなんだから、やりなさい」と、「興味のある人は、誰でもいいから使ってごらんなさい」とやったんですよ。そしたら、だんだん自分の領域を侵されちゃうじゃないですか。それで、その人が、やりだした。だから、ものの始めというのは、抵抗があるのは仕方ないんですよ。今まで1冊ずつ本を見て、ここがタイトル、ここはピリオドかカンマでと、長いことやっているんですよ。「この本はこうじゃない、こうだ、こうだ」とか。「どっちだっていいじゃないの」って、ほんとに苦々しかったですよ。でもその人が使いだした。

UTLAS で、ずいぶん助かりましたよ。どんどんどんどん消化しましたでしょう。だから、先生からも文句が出なくなりました。そして今度、和書もできるようになりましたからね。

私は、UTLAS は成功したと思います。日本で最初にオンラインでカタログをとった大学です。ICU がコンピューター化する時、そのデータを全部使えたんですから。今は全部データが蓄積されていますからね。

だけど、全体に保守的。図書館は、ことに保守的。その中の最も保守的なのは、カタログガー。私、アメリカの大学図書館に行った時に、そこのカタログガーの人と話して、「ああー、日本と

同じだ」と思いましたよ。(笑) やっぱ、すごく保守的な。共通した、カタログガ-の特性があるのね。アメリカの、どこかの大学の図書館かに行ったら。

大井 鬼頭先生は、いろいろなICUの調査報告や何かの時に、連名で発表なさっていますよね。私は、あれはすごく大事なことでと思って見ていました。というのは、鬼頭先生ご自分1人の名前でも本当はよかったかもしれない。でも、そこに、一緒に仕事をした人をパートナーして名前を出している。やっぱり彼の業績になりますよね。そういう業績をつくるということは大切ですよ。

鬼頭 そう。コンピューターを黒澤[公人]君に手伝ってもらったから、必ず黒澤君の名前を出して、発表する時も、「あなたも」と言って、加わってもらいました。だけど、そういうのは図書館の人だけじゃないかもしれない。人間のエゴというのかな、それは捨てられないのかなと思うけど(笑)、それがなくなれば、もっと伸びると思う、全体が。

黒澤君は長野県小諸の出身です。彼は人柄が良く、仕事は熱心に取り組んでいました。ICUの図書館のコンピュータ構築を完成させたのは彼の力に依るものだと思います。田植の時期には休暇を取って、田植の手伝いに行っていました。今も続いているそうですが、彼の人柄を表現していると、微笑ましく思っています。

私の長男がニューヨークのコロンビア大学大学院に在籍していた頃、大学図書館を訪問したことがあります。当時地階の書架に未整理のままの和図書が並んでいました。「和図書を整理できる館員がいらない」と窮状を訴えられました。日本から派遣して貰えないか。キャンパス内に宿舍も用意するとの依頼をお引き受けして帰国しました。早速心当たりの館員が所属する非常勤先の図書館に伺ったのです。当然実現可能だと思い込んでいたのに、館員の派遣は出来ないとのお断りの返事を受けたのです。コロンビア大学は待っておられるので、窮余の一策として国立国会図書館に伺ってお願いしました。直ぐに派遣を引き受けて下さったので安堵しました。今でもその図書館から断りを受けた残念な思いは残っています。アメリカの大学図書館と日本の大学図書館の交流が始まる端緒になると思い描いていましたから。

「人の不幸は蜜より甘い」と言う諺がありますが、他者への嫉妬心は動物的本能、生存競争の手段として人間の本性の中に根付いているのかも知れません。他者の幸を祝福できる心が持てる人間になれば、世の中がもっと進歩するのではないかと思います。

小林 だから、鬼頭先生が、お仕事をしながら、いろんなものを調査されたり、書かれたりしているのは、やっぱり、「研究しなきゃ」というのと、その「館長なのに論文1本も……」とおっしゃっていたけれども、やっぱり「プロフェッションは勉強しなきゃ駄目なんだ」というのは、すごくあった。

3. 2 館長へ

小林 でも、いろいろ困難がおありだったと思うんですけども、自分の信念と意思を貫き通して、図書館長までなられたというのは、やっぱり、結局は周りが認めていったということですよ。

鬼頭 これは、やっぱり本当に有り難い話ですよ。図書館長補佐というのになったんですね。これになる時も面倒くさかった、いろいろあったけど、補佐というのは……。図書館長は教授ですよ。

小林 そうですよ、基本的に。

鬼頭 1カ月に1回だけですよ、図書館には。だけど、図書館長であれば、ファカルティー・ミーティング、教授会で図書館の報告をしなきゃいけない。それには1カ月に1回では分からないですよ。だから、図書館長の報告書は、みんな私が作ったんですよ。

小林 ファカルティー・ミーティングは、全部英語だったんですか。

鬼頭 英語だけじゃないと思いましたね。

小林 じゃあ、ネイティブの人は英語で発言し、日本人は日本語で発言し、という。

鬼頭 そうですね。バイリンガル、2カ国語。

小林 鬼頭先生が、その補佐の時、報告とかを書く時は？

鬼頭 日本語と、配るのは英語にしなきゃいけない。もう大変でしたよ、ほんとに。

金沢 結局、館長になられたのは、推薦ですか。

鬼頭 そうです。それで、教授会で、「鬼頭さんが図書館長にならなきゃおかしい」とおっしゃるんですよ。だけど、なれっこないじゃない？ 事務職ですから。それで、学長におっしゃったんですよ。で、学長が決めたんですよ。

理学科の教授高木純館長は、図書館を内から外から愛情を持って観察し、指導してくださった方でした。ほとんど毎日のように図書館に来てくださって、種々と提案や意見を出してくださいました。そして私の仕事振りを良く観察してくださったのです。その結果、教授の回り持ちの図書館長制度はおかしい。飾り物の図書館長を廃止すべきだと、当時の学長渡辺保男先生に進言なさったのです。鬼頭が造りあげているICUの図書館の実績を評価して館長にすべきだと強く主張してくださったのです。だけど、事務職の図書館員が館長になれるはずがないのが大学です。それを押し切って、渡辺保男学長は鬼頭を図書館長にすると決断してくださったのです。

学内では、大変な反対が起こりましたよ。副学長のセクレタリーの女性2人が、わざわざ学長に進言に行ったと聞いています。「鬼頭さんは大学院を出ていません。図書館長となるべき人は、大学院卒でなければ資格は無い。」みんなに言い触らしたの。それで、私は大学院を出てないですから、「大学院も出てないのに図書館長ですってさ」と。

周囲の反対を押し切って渡辺保男学長は、鬼頭を図書館長に任命してくださったのです。日本の大学図書館で、事務職の図書館員が図書館長になった第1号です。ありがたいことです。閉鎖社会、教授優先、実力よりも名誉優先の大学の中に新風を吹き込んでくださったのです。

そしたら、事務のほうの関係の人たちが、今度は……。図書館長になると、給与の表が別なんですよ、事務職と管理職で。その図書館長になった時、ちょうど4月からですから、事務職も1級上がるんですよ。級が上った給与表を使わずに、今までの表を管理職に横すべりにして、管理職本来の給与表を一級下に当てたんです。それで、上がって行くのに、低くしましたよ。

それを会計の人が、前に図書館にいた人が「鬼頭さん、調べなさいよ」と言うの。「何を?」「給与表が変わったんですよ」「そう? 知らないけど」「給与表が変わったんですよ。変と思いませんか」「何が?」「鬼頭さん、給与表で上がってないですよ」。だから、「言え」と言うわけ。でも私、「そんなのいいわよ」と言ったのね。「もう、そんな細かいことはいい」と言ったの。そしたら、「年金になったら損しますよ」。(笑) 今考えたら、そうだったの(笑)。「いいわ、お金のことなんかどうでも」なんて言って、その時は大きなことを言ったけど、今になったら、そうだな、言っときゃよかったなと思っていますけどね。それで、図書館長に任命されたんです。

3. 3 大学教育など

金沢 ちょっと話は飛ぶかもしれませんが、図書館学を教えられる時、どういう魅力をとというか、どういうことをポイントにというか、学生に伝えられたいというところがありますか。

鬼頭 大妻女子大では、参考業務を担当しましてね。学生に家紋についての質問を出したんです。各自、家の家紋を調べて来るように、と。もう、その時、家紋が伝承されていないことを知ってびっくりしました。両親に聞いても、両親が知らなかったと言う答なの。仏壇に家紋が付いていた。紋付羽織を出して家紋を見た。日本の伝統が受け継がれていかないのかと思いましたね。

ICUで、教えてますでしょう。あっちのほうでゴチョゴチョゴチョと話している子がいたんですね。ああ、あの2人しゃべってるなと思ったら、チャッと1人の男の子が立って、「君たち、しゃべりたいんだったら外へ出ろ」と言ったんです。学生が学生に言うんですよ。そこが違う、ICUとよその学校とは。私が言わなくても、学生のほうが言う。

それから、ICUで、話をしていたら、ガタガタガタ、ガタガタガタと音がしたの。話をしながら、この音は何だろうと思ったら、目が見えない、点字を打っている音。あれには驚きました。2人いましたよ。1人は、先生が、その前に「何々君が先生のクラスを取りたいと言っている。ただし、目が見えない。だから、点字を打たせてもらいたい。それを許可してもらえますか」と言うから、「ああ、どうぞ」と言ったの。その子は知っていたの。だけど、その子の後でしたね。ガタガタガタガタ、何だろうと思ったら、点字を打っている。ICUには、そういう子が2人いましたね。

それから、図書館見学をしたんですね。ICUの場合には、「ライブラリー・サイエンス」で広いですよ。だから、いろんなことをやらなきゃいけない。それで、国立国会図書館の見学に連れて行ったんですね。で、その子は目が見えないから、私が車に乗せて。その前に、図書館を見て、感想を書くのをやったんです。それは、どこでもいいと言ったんです。で、その子は目が見えないから、私が三鷹の図書館に連れて行ったんです。そしたら、中に入っていったら、その子が「ああ、この部屋は明るいですね」と。目が見えないんですよ。「この部屋は明るいですね。気持ちがいい場所ですね」と言うの。私、それには本当にびっくりしましたね。感覚、皮膚感覚で分かるのね、と思いますよ。こっちは気が付かない。明るいなんて当たり前だから。それが、そう言ったの。そして、たぶん同じ子だと思うんですけど、国会図書館に行

く時に、車で、「先生、これは高速道路の外回りですか、内回りですか」と（笑）。私、外回りも内回りも知らなかったの。ただ、いつも走っていたから。恥かしいちゃいましたよ。「あれ？ こっち外？ 内？ どっち？」なんて、「えーっ」と思いましたよ。「外回りですか、内回りですか」と聞いたの。だから、目の見えない人というのは、私たち以上に感覚が鋭い。

びっくりしましたね、あれには。それで、ガチャガチャ、ガチャガチャとやってね。その子はアメリカの大学へ行きました。目が見えなくて行ったんですから、すごいですよね。どうしたかなあ、あの子なんかは。2人、そういう学生がいましたね。ほかでは目の見えない人はいないけれど、ここには、そういう人がいましたね。面白いですねえ。学校によって、校風が違いますよね、やっぱり。

小林 今日のところは、そしたら、こちら辺で。大変長い時間、どうもありがとうございました。

<解説>

表1. 「大学図書館ランキング」の推移

| 出版年 | 順位 | 調査対象大学数 |
|------|----|---------|
| 1994 | 1位 | 561 |
| 1995 | 1位 | 561 |
| 1996 | 2位 | 585 |
| 1997 | 2位 | 595 |
| 1998 | 6位 | 614 |
| 1999 | 1位 | 632 |
| 2000 | 不明 | 661 |
| 2001 | 3位 | 682 |
| 2002 | 2位 | 699 |
| 2003 | 3位 | 710 |
| 2004 | 4位 | 717 |
| 2005 | 4位 | 726 |
| 2006 | 1位 | 723 |
| 2007 | 1位 | 643 |
| 2008 | 2位 | 643 |
| 2009 | 3位 | 670 |
| 2010 | 1位 | 680 |
| 2011 | 1位 | 696 |
| 2012 | 2位 | 709 |

※これは、蔵書数、受入、貸出、図書館費より指数評価を導き出し、総合ランク化したもので、「順位」は全体の中での国際基督教大学図書館の順位である。国際基督教大学図書館の不動の地位をみてとることができる。

※『図書館の再出発：ICU 図書館の15年』p.142をもとに、後年の数字を補い『大学ランキング（週刊朝日進学MOOK）』各年版より作成。

※2000年版は国際基督教大学図書館未掲載

その後、鬼頭は国際基督教大学図書館長として、今日の同図書館発展の礎をつくった。館長就任期間は1989-1991年の2年間とけっして長くはないが、館長補佐を含めると、16年間実質の図書館のトップに立って管理運営にあたったのである。

鬼頭の館長時代の1990年版の『日本の図書館』の統計¹⁵をみると、国際基督教大学図書館は、学生規模（当時2,317人）に対して蔵書数37万9千冊で、全国私立大学の蔵書数の平均の17万2千冊と比べて、いかに抜きん出た存在であったかが分かる。特筆すべきが、学生1人当たりの館外貸出冊数で、1人当たり年間42.3冊。これは、比較が難しいので大まかな目安だが、同じ資料によると全国の1990年の私立大学の学生数が、155万534名で、学生個人貸出し数が、314万3,929冊であり、年間1人当たり平均にすると2.0冊であった。また、開館時間は22時30分までとなっており、これも他に類を見ない数字である。

その後の国際基督教大学図書館については、『図書館の再出発：ICU図書館の15年』（2007年）¹⁶という図書にまとめられており、鬼頭の個人名こそ見いだすことはできなかったが、この発展を築いたのはまさに鬼頭を中心とする図書館員たちであった。同書の11章に1994年から朝日新聞社が出している『大学ランキング（週刊朝日進学MOOK）』¹⁷という図書の各年版から「大学図書館ランキング」の国際基督教大学図書館の総合順位を抽出しているものがあるが、それに2007年版以降のものを補ったのが、表1である。

なお、文中に出てきたUTLASについて補足すると、『図書館情報学辞典』（初版、1997年）¹⁸によると、「北米の四大書誌ユーティリティの1つであり、1971年にカナダのトロント大学図書館の独立採算部門として発足した。当初はUniversity of Toronto Library Automations Systemの頭字語としてUTLASとしていた。1973年にはオンライン分担目録システムCATSS（Catalogue Support System）の運用を開始し、その後数回の組織的変遷を経て、その名称もUtlas Internal Canadaとした」となっている。

鬼頭は、1983年に「ICU図書館とUTLAS」¹⁹を、1987年に「ICU図書館とUTLASその後」²⁰という記事を発表しており、現在の日本の大学図書館の書誌ユーティリティNACSIS-CATの運用開始が1985年であったことを考えると、その先見の明があったことがわかる。

4. おわりに

鬼頭當子の図書館人としての歩みは、決して平坦なものではなかった。慶応義塾大学図書館学科の第一期生であり、ICU図書館の草創期から司書として活動し、UTLASを導入し、大学図書館の機械化に先鞭をつけたというように、常に先駆者としての役割を果たしてきたといえる。実践女子大学図書館の司書の中にも、ICU図書館の活動に注目し刺激を受けた者がいた。実践女子大学ばかりでなく、全国の大学図書館の注目を集めたICU図書館の中心にいたのが鬼頭當子である。

鬼頭は、ICUの中で変革を試み実現させてきたが、それを内だけにとどまらず全国の大学に

拡大させてきた意義は大きい。その一つは私立大学図書館協議会逐次刊行物研究分科会を設立し、図書中心の業務とは性格も整理方法も異なる雑誌と新聞を前面に出して、業務の促進を図ったことである。この分科会是最盛期には約 50 大学が参加し、積極的に研究報告活動を行った。この分科会の特色の一つに欠号補充を目的にした相互協力があり、参加館から出た重複などの不要雑誌が提供され、欠号を埋めるために利用された。四大学（成蹊大学、東京女子大学、東京経済大学、国際基督教大学）図書館の新聞の分担保存、東京西地区相互協力は鬼頭の発案と実行によるところが大きい²¹。

かつて図書館司書は本の番人といわれた時代があった。鬼頭がインタビューで語っているように、大学は保守的で変化を求めないところとされてきた。しかし、時代の進歩と技術の発展によって、大学も図書館も変化してきた。鬼頭はそうした変化を 1 つのチャンスと捉え、図書館は変わるものということを証明してきたといえる。

ICU 図書館を退職後に、大学ではできなかったことを実現してみたいと考え、MK 図書館研究所を設立した。アフリカのケニアに大学図書館をつくるという活動で第 1 回図書館サポートフォーラム賞を受賞している。また、図書館の今日的な課題をテーマに講演会なども企画し、阪神淡路大震災時には資料保存と災害に関するセミナーを開催している。

一人の図書館人として、鬼頭の意識の中には常に図書館があった。「他者の幸を祝福できる心が持てる人間になれば、世の中がもっと進歩するのではないかと思います。」と語っているが、私個人の利益にこだわることなく、それを広げていこうとする精神に、我々は学ぶところが大きい。鬼頭の生き方は、図書館人—ライブラリアン—筋の生き方であると同時に、戦後女性の生き方を示すものである。

本稿の続編としては、冒頭で述べたように、長倉美恵子、石井紀子等の実践女子学園関係者に継続して聞き取りを行うことにより、「戦後の図書館学教育と女性司書」の一端を浮かび上がらせる予定である。

最後になったが、長時間のインタビューに応えていただいた鬼頭當子氏と、正確なテープ起こしに当たってくれた北村薫氏（アトリエ・ソレイユ）に感謝申し上げる。

注

- 1 オーラルヒストリー研究会編『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』日本図書館協会、1998.3.
- 2 石井敦編『図書館を育てた人々：日本編 I』日本図書館協会、1983.6.
- 3 日本図書館文化史研究会編『図書館人物伝：図書館を育てた 20 人の功績と生涯』日外アソシエーツ、紀伊國屋書店（発売）、2007.9.
- 4 ディー・ギャリソン著；田口瑛子訳『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920 年』日本図書館研究会、1996.1.

- 5 スザンヌ・ヒルデブランド編著；田口瑛子訳『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』日本図書館協会，京都大学図書館情報学研究会，2002.7.
- 6 宮崎真紀子「女性図書館員の誕生：大正期に図書館員教習所で学んだ女性たちを中心として」『図書館界』47 (6), 1996.3, p.342-347.
- 7 豊後レイコ著；田口瑛子，深井耀子企画・編集『あるライブラリアンの記録：レファレンス・CIE・アメリカンセンター・司書 講習』（シリーズ私と図書館；No.1），女性図書館職研究会，2008. 2. などの成果があり、「シリーズ私と図書館」は2012年9月現在5冊が刊行され、4名の図書館人がとりあげられている（うち、3名が女性、1名は男性）。
- 8 実践女子学園100年史編集委員会編『実践女子学園100年史』実践女子学園，2001.3, p. 447.
- 9 統計局ホームページ／日本の長期統計系列 <<http://www.stat.go.jp/data/chouki/>> 中の「図表19-1 労働力状態，男女別15歳以上人口－国勢調査（大正9年～平成17年）」
<<http://www.stat.go.jp/data/chouki/zuhyou/19-01.xls>> [引用日：2012-09-07]
- 10 三浦太郎，根本彰「占領期日本におけるジャパン・ライブラリースクールの創設」『東京大学教育学部紀要』(41), 2002.2, p.475-489.
- 11 鬼頭梓，鬼頭梓の本をつくる会『建築家の自由：鬼頭梓と図書館建築』建築ジャーナル，2008.6.
- 12 細野公男「図書館職における女性専門職：実態調査」『昭和52年度 全国図書館大会記録』全国図書館大会実行委員会，1978.3, p.76-80.
- 13 「図書館雑誌」編集委員会「女性図書館員の仕事と生活：アンケート結果報告」『図書館雑誌』67 (3), 1973.3, p.79-82.
- 14 鬼頭當子「サービス側から見た図書館家具の問題」『家具とサイン：図書館施設計画マニュアル』（シリーズ 図書館の建築 2），日本図書館協会，1984.12, p.15-23.
- 15 『日本の図書館：統計と名簿1990』日本図書館協会，1990.11.
- 16 畠山珠美 [ほか] 著『図書館の再出発：ICU 図書館の15年』大学教育出版，2007.12.
- 17 週刊朝日編『大学ランキング（週刊朝日進学MOOK）』朝日新聞社
- 18 日本図書館学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』丸善，1997.12, p.3.
なお、その後アメリカ、ひいては世界の書誌ユーティリティはOCLCに統合されてきており、日本の書誌ユーティリティはNACSIS-CATに統合されつつある。
- 19 鬼頭當子「ICU 図書館とUTLAS」『丸善ライブラリーニュース』（125），1983, p.1-3.
- 20 鬼頭當子「ICU 図書館とUTLAS その後」『丸善ライブラリーニュース』（143），1987, p.1-3.
- 21 鬼頭當子「東京西地区大学図書館相互協力連絡会のこと」『Library & Information Science News』（6），1976.5, p.5-6.